

「無義をもって義とす

かけはし

梯 實圓和上さん（1927 ~ 2014）の「念仏には無義をもって義とす」（歎異抄第十条）と題した、ご法話を紹介します。

.....

「無義をもって」の「義」は「はからい」ということです。

お浄土へ生まれるのには悪いことをやめて善いことしなければならぬのではないかとか、^{きたな}汚い心を抑えて、清らかな心にならなくてはいけないのではないかと、私たちが自分の頭で考えて、判断を下すこと、それを「はからい」と呼びます。

その人間の知識でもって仏さまのお救いはかり知ろうとすることを「義」というのです。そういうお前の判断をまじえるな、ということをして「無義」と言われたのです。

あとの「義とす」の「義」の方は正しい本来の意味ということですが。

つまり、「お念仏は、私のはからいをまじえないで仏さまの本願のお救いを素直に受け取ること、それが正しい受け入れ方である」ということです。

他力の念仏というものは、阿弥陀さまの仰せの通り「助けるぞ」と言われたら「助けて下さる」と受け入れればよいのです。

死ぬんではない、限りないいのちの世界に生まれて行くんだと思いなさい、これが阿弥陀さまの願いです。だから「そうでございますか。私は何もわかりませんが、あなたの仰る通りに、私は死ぬのではなく生まれていくのだと思いきらせていただきます」と、一遍言うてみて下さい。「そうか私は死ぬのだと思っていたけれども、あれは死ではなく人間の世界の終りだったただけだ。私に臨終はあるけれども死はないのだ」と一遍言うてみて下さい。全然違います。

私には人間としての終りはあるが死はない。私には限りないいのちの領域に包まれ、限りないいのちの領域に溶け込んでいくのだ。そんな世界があるのだ。

阿弥陀さまがそう仰って下さるのですから、その言葉をずっと受け入れた時、私の心に新しい秩序が出来上がっていく。

だから、私たちはもうごちゃごちゃ言わないで、ただ阿弥陀さまの仰せを「有り難うございます」と受け入れさせていただくというのが、正しい念仏の受け入れ方、本願の受け入れ方だよという事があります。

.....

表題の「念仏には無義をもって義とす」とは、お念仏の教えのいただき方のことを言っているのですが、これを和上さんは、「私のはからいをまじえないで仏さまの本願のお救いを素直に受け取ること」と大変分かりやすく解説されています。

つまりお念仏の教えは、阿弥陀さまの仰せをそのまま受け取るだけでいいと、仰っているのです。

「お前を助けるぞ」と仰っているのですから「ありがとうございます」と素直に頂ければいいのです。「お前は死ぬんではない浄土に生まれるのだ」と仰っているのですから「ありがとうございます」と素直に頂ければいいのです。

私はこう思うなどごちゃごちゃ理屈をこねるのではなく、ただただ阿弥陀さまの仰せを素直に頂ければいいと、このように仰っています。

全くその通りであります。

ところが、煩惱にまみれた私たちは、その仰せを「ハイ分かりました。」と素直に受け取れないところがあるのです。「そんな簡単なことで本当に大丈夫か？」と、疑いを持つのです。これが「はからい」です。

そんな私達の疑問に答えるような出来事が『歎異抄』第九条にあります。

ある時、弟子の唯円坊が親鸞聖人に心の内を訴えるのです。

「お師匠様、いくらお念仏を称えても心から喜ばません。また浄土へ生まれたいという心も起こりません。どうしたものでしょうか」

この唯円坊の疑問こそ私達万人の疑問でもあります。

この疑問に親鸞聖人は、「私もこの不審があったが唯円もそうだったのか」と申された後、次のように答えられるのです。

「よくよく考えてみたら、本来なら喜ばなければならない尊いみ教えに出会いながら喜べないのは煩惱のせいです。また急いで浄土に参りたいという心も起こらず、ちょっとした病気でもすると、もしや死んでしまうのではないかと心細くなったりするのも煩惱のせいです。

そんな愚かな私たちのことをとっくの昔に知りつくした上で（仏かねてしろしめして）『だからこそ救わずにおれないんだよ』と、私たちのために用意して下さったのが本願のお救いの法なのです。愚かな我が身のことを思えば、ますます阿弥陀さまの本願のお救いをたのもしく仰がれ、往生は間違いないことだと思えます」と答えられたのです。

ここで注目すべきことは、「仏 か ね て し ろ し め し て」というお言葉です。

つまり私が求めるに先立ってすでに仏さまの方で救いの法が用意されていたということです。

この仏さまのお心に気づかされる時、「ああ、そうでしたか。もったいないことです」と、素直に仏さまの仰せをいただくことが出来るようになるのです。

ここが大事なのです。

また、親鸞聖人のお師匠さんである法然聖人の場合はどうかといいますと、聖人は「私がお念仏の教えに帰依するに至ったのは『観経疏』の一文によるものだ」と仰っています。

その一文とは

『一心専念弥陀名号 行住坐臥不問時節久近 念々不捨者是名正定之業 順彼仏願故』

要約すれば、「お念仏一つで往生成仏できるのは、『仏さまの約束ごと』（順彼仏願故）だから」というものでした。

つまり、私が救われることは、すでに仏さまによって約束されていたことなんだということです。

このようにお念仏のお救いは、「あなたが求める前にすでに用意（約束）しているんだよ」という阿弥陀さまの仰せを素直に頂くことによって成立するのです。

まさに「無義をもって義とす」であります。

ご法話に「私には人間としての終りはあるが死はない。私には限りないいのちの領域に包まれ、限りないいのちの領域に溶け込んでいくのだ。そんな世界があるのだ。」と仰っています。

阿弥陀さまの仰せを素直に頂くことによって恵まれる信心の世界です。
まことに勿体ないことです。 合掌

「光明寺だより 99号」平成30年12月